

聖書: ヨシュア記 18 章

説教題: その地を歩き巡り

日 時: 2010 年 8 月 15 日

ヨシュア記 13 章からイスラエル各部族への土地の割り当て作業が始まって、今日は第 18 章です。イスラエルはシロに集まり、そこに会見の天幕を建てます。シロという町は、エフライム族の割り当て地の中にあり、約束の地のほぼ中心にあります。イスラエルはこれまでカナンの地の入口、ヨルダン川を渡ってすぐのギルガルを宿营地として来ました。そこから彼らは移動して来て、契約の箱を安置し、様々な祭儀を行なう「会見の天幕」をこのシロに建てたのです。これは主が前からお語りになっていたことです。申命記 12 章 5 節:「あなたがたの神、主がご自分の住まいとして御名を置くために、あなたがたの全部族のうちから選ぶ場所を尋ねて、そこへ行かなければならない。」。レビ記 26 章 11~12 節:「わたしはあなたがたの間にわたしの住まいを建てよう。わたしはあなたがたを忌みきらわない。わたしはあなたがたの間を歩もう。わたしはあなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる。」 これはイスラエルにとって素晴らしい導きです。まずこれはこの地の征服がここまで進展したことの証拠です。彼らはこれまで約束の地のはじっこ、ギルガルをベースキャンプ場として来ましたが、今やこの地のだ真ん中に移動しても大丈夫。先住民を恐れたり、彼らに妨害されることがありません。それだけ約束の地の全体的な支配をすでに彼らは手に入れていたということです。そしてこれは主が共におられることを見える形ではっきり証しするものです。会見の天幕は約束の地の中心地シロに建てられました。このことはまさに神が私たちの中心におられるということを証しするものです。イスラエルは自分たちの真っ只中に住んで下さる主に感謝し、この主に励まされ、慰められて、一層主に信頼し、従う生活へ進んで行くように導かれたのです。

ところが 2 節以降を見ると、7 つの部族の歩みが停滞していたことが記されています。彼らは自分たちの割り当て地を受け取って、その地に進んで行くことをしないでいた。これまでヨシュアの指導の下、勇敢に先住民と戦って来た彼らなのに、なぜ自分たちの相続地を受け取る段になって、このような消極的態度を示していたのでしょうか。確かにカナンの地を相続することは、彼らにとっては待ち望んだ夢であり、大いなる祝福です。しかし現実には色々と困難がありました。細かいところに目を向ければ、まだまだ占領が完全にできていない地域が残っていました。先住民が根強く生き続け、ガードしている町々がありました。イスラエルの各部族が自分たちの相続地を受け取る目的の一つは、それぞれの部族が割り当てられた地域に出て行って、そこに住み、その地の支配を完全なものにするということでした。これがなかなか困難で骨が折れる仕事です。前の 17 章 16 節でも、ヨセフ族はこう言ってたじろいでいました。「谷間の地に住んでいるカナン人も、ベテ・シェアンとそれに属する村落にいる者も、イズレエルの谷にいる者もみな、鉄の戦車を持っています。」

そういう状況の中で、いざ自分たちの相続地を受け取ろうとする段になって、彼らは気が進まなくなっていたのでしょうか。今すぐそのことをしなくても、しばらくはまだ安泰です。この地の基本的な支配は手に入れていたからです。そのため、彼らは主から与えられた使命に踏み出して行くことを先延ばしにしていた。中途半端な状態にとどまり、皆でこのようにゴロゴロしているのも悪くはないな！という息けた生活に陥っていたのです。

そんな 7 つの部族をヨシュアは叱咤激励します。3 節:「そこで、ヨシュアはイスラエル人に言った。

『あなたがたの父祖の神、主が、あなたがたに与えられた地を占領しに行くのを、あなたがたはいつまで延ばしているのか。』 ヨシュアが言っていることは、神はすでにこの地をあなたがたに与えておられるということです。あとはそれに手を延ばして受け取るだけに差し出されています。なのにその命令に従い、取り組もうとしないのは、神に対する何という忘恩、恩知らずな態度か！ということです。これは彼らの父祖すなわちアブラハムの時代から約束されて来た祝福です。その約束が今まさに成就されるために神がお膳立てして差し出して下さっています。なのに、その用意されたものを受け取ろうとしないとは何たる応答、神への侮辱的行為か！ということです。そんな彼らの根底にあるのは、やはり不信仰でしょう。全能の神により頼む信仰が薄い。生きて働いておられる主を正しい目をもって見上げていないので、前にある課題を否定的にばかりとらえ、その歩みが止まってしまっている。あるべき信仰の態度として、ヨシュアは前の章の 18 節でこう言っていました。「山地もあなたのものとしなければならない。それが森であっても、切り開いて、その終わる所まで、あなたのものとしなければならない。カナン人は鉄の戦車を持っていて、強いから、(なおさら主の力に頼って) あなたは彼らを追い払わなければならないのだ。」

そこでヨシュアは 7 つの部族から 3 人ずつを選ばせ、まだ割り当てられていない地を歩き巡って来るように命じます。そして彼らは相続地の様子を書き記し、それをヨシュアのところに持って来ます。そして 7 分割した割り当て地について、主の前でくじを引く。なぜ 7 つかということが 5～7 節に記されています。すでにユダ族とヨセフ族すなわちマナセとエフライムは割り当て地を受け取っています。またレビ族は各部族の礼拝生活に仕えるため、自分たちの割り当て地は持ちません。またヨルダン川東側にルベン、ガド、マナセの半部族がモーセによって割り当て地を受け取っています。それゆえ残りは 7 部族となります。

ヨシュアはなぜこの作業を彼らに命じたのでしょうか。それは怠けている彼らを信仰による服従の歩みに突き動かすためでしょう。ゴロゴロしてまどろみ、手足の動きが止まっている彼らに、もう一度約束の地を見て来させる。どんな町々がそこにあるのか、改めて主が約束下さっているものを細かく調べて来る。そうして本来取り組むべき仕事に着手するように駆り立てようと、ヨシュアは取り計らったのでしょうか。その結果、7 つの部族は重くなっていた腰を上げて、なすべきわざへ向かって行きます。

今日の章の残りの部分は、7 つの部族の内、まずベニヤミン族の割り当て地について記しています。11 節にありますように、彼らの地域は南はユダ族、北はマナセ族に挟まれた間の地域でした。その境界線が 12 節以降にあります。北側の境界線は、その北に位置するヨセフ族の南の境界線と一致します。ヨセフ族の南の境界線については 16 章 1～4 節に記されました。ヨルダン川から出てエリコ、ルズすなわちベテル、ベテ・ホロンと至る線です。西の境界線は今のベテ・ホロンからキルヤテ・エアリムに至る短い線です。南の境界線は、その南に位置するユダ族の北の境界線と一致します。ユダ族の北の境界線は 15 章 5～9 節に記されました。ベン・ヒノム、エン・ロゲル、エン・シメシュ、ボハンの石、ベテ・ホグラの傾斜地、最後はヨルダン川の南端へと至る線。そして東の境界線はヨルダン川そのものとなります。そしてそこにある町々が 21 節から記されています。前半の 21～24 節は東側の町々で、全部で 12 あります。エリコ、ベテルなどの重要な町がそこに含まれていました。25～28 節は西側の町々です。ここには先に 9 章で見たイスラエルと平和協定を結んだギブオン、ラマ、ペエロテの町がありました。またここにはエブスすなわちエルサレムがありました。先のユダ族の相続地の中にも

このエブスすなわちエルサレムがありました。おそらくここにはベニヤミン族、ユダ族、そしてエブス人が混在して住んでいたということなのでしょう。全部で14の町々となります。そして続く19章では残りの6つの部族の相続地が一気に決められ、記されて行くこととなります。

私たちは今日の御言葉の下で自らを振り返ってみてどうでしょうか。今日の章に出て来た7つの部族に似ているところはないでしょうか。主は素晴らしい祝福を用意しておられるのに、適当なところで満足し、信仰による歩みをストップしていることはないでしょうか。確かに主に従う生活には戦いがあります。イスラエルの行く先にもなお敵がいましたし、他の課題もありました。しかしそこで問われていることは、その困難さを人間的に計算して、難しそうだからやめにしようという態度を取るのか、それとも主に信頼する者を主は必ず助けて下さると信頼して、どのような中でも御言葉に従うことを何よりも大切にして行く歩みへ進んで行くのか。心に留めたいことは、今日の章冒頭の1節にまず恵み深い神が示されていたことです。主は彼らのただ中にいることをそこで示しておられました。わたしはこの地まであなたがたを導き、この地でもあなたがたと共にいる、と証しておられました。この恵み深い神を仰ぐところから、彼らの信仰の歩みは強められ、導かれなければなりません。

神は今日の私たちとも共にいて下さいます。イエス・キリストにあってご自身が共にいたもう神であることを私たちにはっきり示しておられます。そのような神がおられるのに、その神の御前で私たちも7つの部族のような気力のない、怠けた歩みをしていることはないでしょうか。今のレベルまでは主の御言葉に従ってきたけれども、この辺でペースを落として自分の好きなように歩んでも良いのではないか、という態度を取って、主に大変失礼で、御心になかない姿をさらけ出しているということはないでしょうか。もしそういうところがあると思うなら、共にいて下さる主の御前で悔い改める者でありたいと思います。そして主はどんな祝福を用意下さっているのか、イスラエルの代表が改めて約束の地を行き巡ったように、私たちも聖書のあらゆる書を行き巡ってそのことを心に刻みたい。主に従う歩みに常に困難はあるでしょう。しかし共にいて下さる主が、従う歩みへと進む私たちを助け、それを乗り越えることができるように導いて下さいます。その主により頼んで、困難も乗り越えさせて頂き、従う歩みの先に主が用意下さっている祝福を十分に受け取り、御名に栄光と賛美を帰す歩みへ進みたいと思います。